



町民文芸

只見短歌会

令和二年十月詠草

大塚栄一

指導

暑き日々続きて漸く秋なるや山の我が家にこうろぎ鳴き初む

馬場 八智

針に通す糸は斜めに切るんだよ妹に教ふる兄も幼し

目黒 富子

花好きな友亡くなりて家こはし手入れなき庭花も絶へ行く

渡部ゆき子

我れ歩む路肩にそよ微ぐコスモスの花びらやさし青空に映ゆ

関谷登美子

老いし従姉腰痛やはらぐその理由わけは仔猫と遊び筋肉の増す

新国由紀子

暑さ避け独り畑に鋤を持ち土寄せおれば夕鳥鳴く

渡部ヨリ子

コロナ禍で感染止まぬこの時期は子等も孫等も家に帰れず

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十月定例会

宇多喜代子

指導

友逝きて見上げる空や鰯雲
無人駆見る人もなし彼岸花

信

秋めくや遠き水音離れくる
白露なる闇濃厚と思いしや

都

山百合の香りふりまく風の道
草むしりかがむ鼻先くすぐられ

味代子

紅葉山峯をふちどる姫小松
詣う人のなき山祠薄紅葉

恒夫

越後峰へしきりと夜の稲光
食欲は小振りに握る拔菜飯

礼

三才児初めて食べる栗ごはん
実の入れぬ大豆の枝を切り倒す

一穂

亡き友の実家は更地葛の花
台風の進路気がかり畑仕事

修一

早生栗を包まれて辞す日暮れかな
満山をひねもす奏で紅葉濃し

幸生

